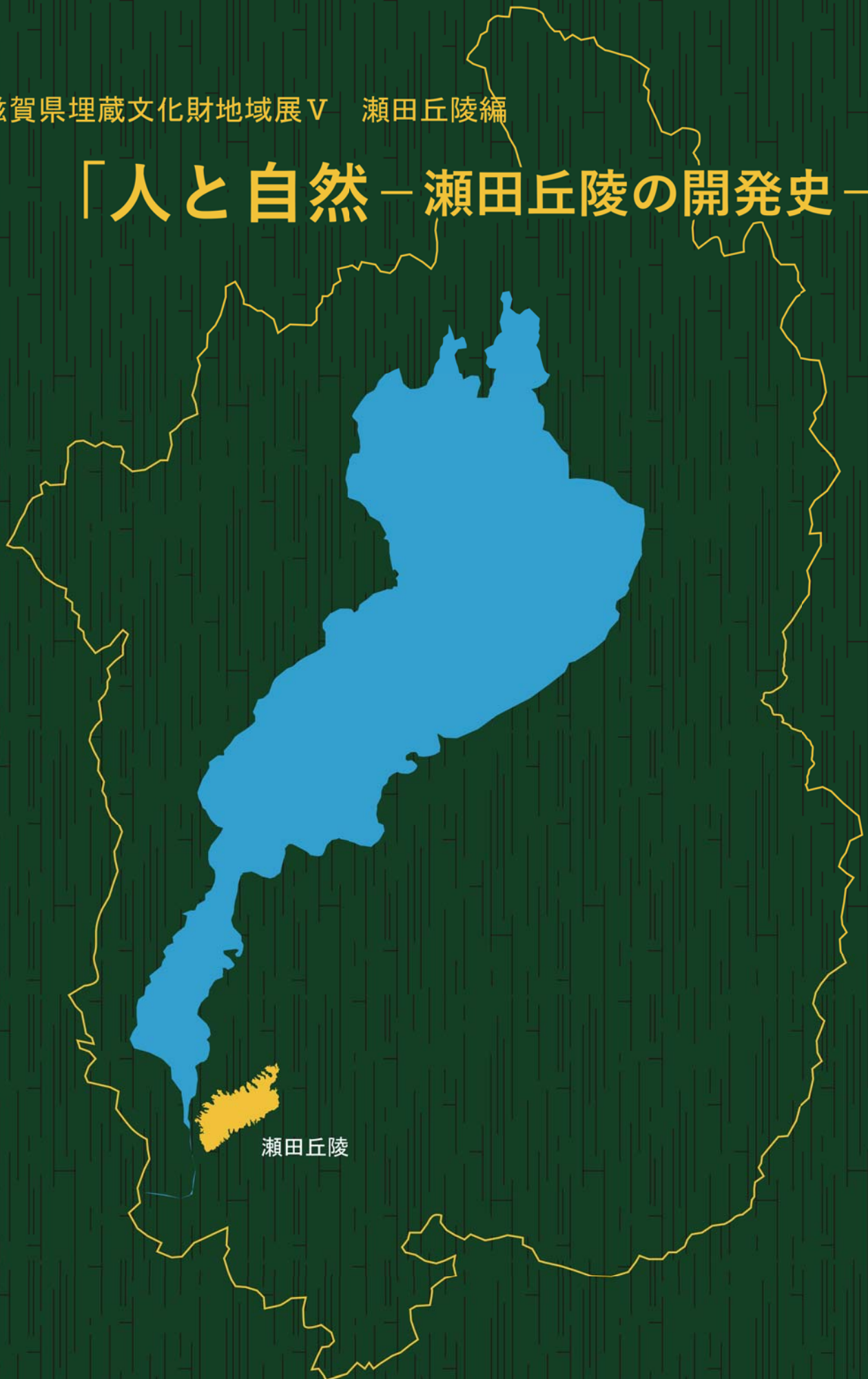


滋賀県埋蔵文化財地域展Ⅴ 瀬田丘陵編

「人と自然－瀬田丘陵の開発史－」



瀬田丘陵

主催：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

後援：滋賀県・大津市・草津市教育委員会

◆はじめに

滋賀県埋蔵文化財地域展V 瀬田丘陵編

人と自然 —瀬田丘陵の開発史—

【目次】

| | |
|-----------------------|--------|
| プロローグ - 自然との共生 | ・・・ 2 |
| I. 開発前夜 - 大津宮の時代 | ・・・ 3 |
| II. 大開発時代 - 生産遺跡と近江国府 | |
| i) 生産遺跡の展開 | ・・・ 4 |
| ii) 役所の整備 | ・・・ 7 |
| III. 道がとおる地 | |
| i) 関津遺跡 | ・・・ 9 |
| ii) 黒土遺跡・榊差遺跡 | ・・・ 10 |
| エピローグ | |
| - 近世から現代 災害と自然荒廃 | ・・・ 11 |
| 瀬田丘陵を楽しむ | ・・・ 12 |

瀬田丘陵は、西側を瀬田川、東側を旧草津川のあたりで区切ることができる地域で、行政区分としては大津市と草津市になります。標高 100m～180m の丘陵で、北側は湖岸に向かって緩斜面が続き、国道1号、JR 東海道線が通過し、南側は大戸川が流れる田上低地と接し、比高 50m 程度の急斜面となっています。そして、瀬田川挟んだ対岸には膳所・石山丘陵が延びており、琵琶湖側から見ると壁のようになっています。この壁の隙間となるのが瀬田川です。

古代には、瀬田川沿いに田原道が通り、大和国とつながっていました。田原道は、勢多橋東詰で東山道と合流していました。合流地点の東側丘陵上には、現在の県庁にあたる近江国庁が置かれ、東に向かって谷沿いに工房が連なっていました。国庁を通過した東山道は、丘陵北側端を北東方向にはしり、旧草津川を渡った地点で東海道と分岐することとなります。つまり、瀬田丘陵は西側で東山道と田原道、瀬田川、東側で東山道と東海道が分岐する中心に位置しています。

古代の近江国は、『藤氏家伝』武智麻呂伝に

近江国者、宇宙有名之地也。地広人衆、国富家給。東交不破、北接鶴鹿、南通山背、至此京邑。水海清而広、山木繁而長、其壤黑埴。其田上々。

とあり、土地が広く、人口が多い豊かな国であること、交通の重要地域あること、自然資源に恵まれていることと、奈良時代の近江国の価値を余すことなく表現しています。近江国は、都から東に向かう主要道が通っていました。東海道は鈴鹿峠を越えて伊勢国、東山道は美濃国、北陸道は越前国・若狭国に通じていました。それぞれ鈴鹿・不破・愛発に関が設けられ、畿内に隣接した東国への玄関口として政治・経済・軍事的に重要な位置にありました。そして、近江国は『延喜式』の規定によれば、国力を示す4等級の最上位「大国」の一つでした。そのため中央から任官する国守も有力家出身者でした。

大国に位置付けられていた近江国の国力は、地勢的な要素と豊富な資源という地域が保有する「自然」が大きく作用し、それを活かすことで地域の発展＝開発が進みました。まさに瀬田丘陵は近江国の中心であるとともに、縮図でもありました。

| | | | |
|------|--------------|---|-------------------------------|
| 縄文 | 7,000年前 | | 石山貝塚 |
| | 5,000年前 | | 粟津第3貝塚 |
| 弥生 | | | |
| | | | |
| 古墳 | | | 横尾山古墳群 山ノ神遺跡 |
| | | | 唐橋遺跡 源内峠遺跡 黒土遺跡 榊差遺跡 |
| 飛鳥 | 667年 | 大津に宮が移る | |
| | 673年 | 壬申の乱 | |
| | 694年 | 藤原京に遷都 この頃、石山国分遺跡から瓦、田上山から木材が藤原京に供給される | |
| | | | 木瓜原遺跡 野路小野山遺跡 |
| 奈良 | 708年 | 近江国に命じて銅銭を鑄造させる | |
| | 710年 | 平城京に遷都 | |
| | 712年 | 藤原武智麻呂が近江国守に就任 | |
| | 740年 | 聖武天皇が行幸、禾津領宮に入る | |
| | 742年 | 甲賀郡紫香楽に離宮を造営 近江国命じ、有力家の鉄穴の独占を禁止 藤原仲麻呂が近江国守に就任 | |
| | 745年 | | 近江国府跡 |
| | 759年 | 滋賀郡内に保良宮の造営を開始 | |
| | 761年 | 石山寺の増改築に着手する | |
| | 762年 | 仲麻呂が近江国浅井・高嶋の鉄穴を賜う | |
| | 764年 | 惠美押勝（藤原仲麻呂）の乱 | |
| 781年 | 藤原種継が近江国守に就任 | | |
| 784年 | 長岡京に遷都 | | |
| 794年 | 平安京に遷都 | | |
| 平安 | 804年 | 山城国の山科駅が廃止、勢多駅に駅馬移管 | 堂ノ上遺跡 |
| | 876年 | 平安京大極殿の用材を近江国から供給 | |
| | 976年 | 大地震により近江国府の建物が倒壊する | |



- ①野畑遺跡
- ②瀬田廃寺
- ③中路遺跡
- ④青江遺跡
- ⑤惣山遺跡
- ⑥近江国府跡 (近江国庁跡)
- ⑦堂ノ上遺跡

古代東山道 (推定)

古代東山道 (推定)

古代田原道

瀬田丘陵

石山国分遺跡

石山寺
石山貝塚

横尾山古墳群

関津遺跡

滋賀県埋蔵文化財センター

源内峠遺跡

木瓜原遺跡

東光寺遺跡

山ノ神遺跡

野路小野山遺跡

黒土遺跡

榊差遺跡

若松神社古墳

栗津第3貝塚

長沢川

狼川

十禅師川

北川

旧草津川

近江国府跡

大戸川

瀬田川

檜橋川

勢多橋

0 2000m

◆瀬田丘陵のかかわる主な遺跡

ベースマップとして大日本帝国測量部明治26年測量図 (1/20,000) を使用

◆プロローグ - 自然との共生



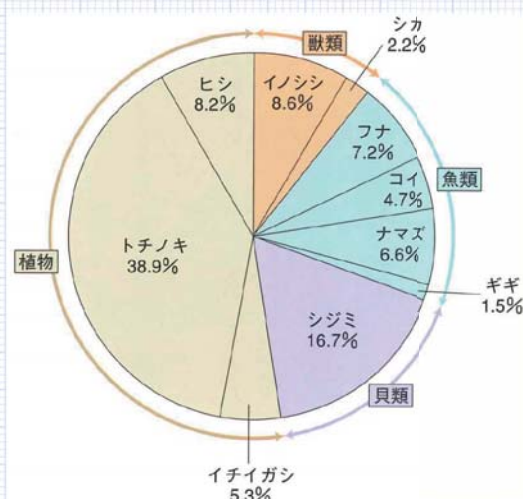
粟津第3貝塚



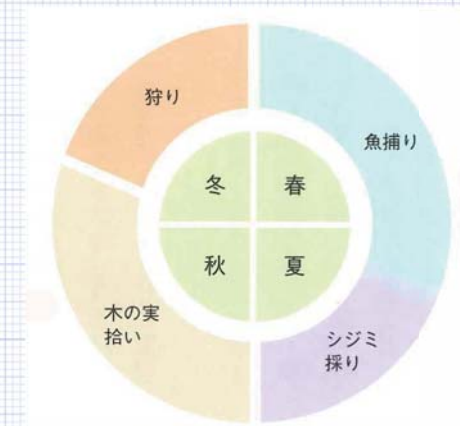
◆01 粟津第3貝塚全景
35m×15mの貝塚で、5,000年前（縄文時代中期）のものです。白色の部分は貝層、濃茶の部分は植物の層です。



◆04 粟津第3貝塚 植物の皮の廃棄状況
貝層と植物層は交互に堆積しており、貝層は春～夏に、植物層は秋～冬に廃棄されていたことが判明しています。



◆02 粟津縄文人の「食卓」（瀬口 2016 年より）
分析の結果、植物 52.4%と魚介類 36.7%で食料構成比の大半を占めること、獣類が 10.9%にとどまることが分かりました。



◆03 生業カレンダー（瀬口 2016 年より）
詳しい分析の結果、季節の移ろいにあわせて自然の恵みを巧みに利用していたことが判明しました。

約 15,000 前、氷河期が終わり、温暖で豊かな森の広がる新たな時代が始まりました。縄文時代のスタートです。

4,000 年前頃を境にして、縄文時代を前半期と後半期にわけた場合、前半期のムラは湖岸と丘陵や山間部が密接に寄り添う環境に営まれる傾向にあります。

この環境では、春～夏には貝類や産卵のために押し寄せた魚類が湖岸でとれ、秋～冬には背後に広がる丘陵や山間部の森の木の実がとれます。年間を通して食料を確保しやすかったため、このような環境が最初に選ばれていたようです。

あわづ
粟津湖底遺跡は、琵琶湖と瀬田丘陵の接点にある縄文時代前半期の大規模なムラの跡です。大量に廃棄されていた貝や魚、木の実が縄文人の知恵と工夫を物語っています。

◆ I. 開発前夜 – 大津宮の時代



横尾山古墳群



山ノ神遺跡



◆05 横尾山古墳群遠景

瀬田丘陵の南西側で7世紀初めから中頃にかけて築かれた古墳群です。約30基の古墳を京滋バイパスの工事に伴い調査をしました。



◆06 横尾山7号墳 石室検出状況 (上)

◆07 横尾山7号墳出土陶棺 (下)

7号墳から出土した陶棺は、滋賀県内では3例しか見つからないことから、被葬者出自を考えるうえで示唆に富んでいます。



◆08 山ノ神遺跡4号窯

4号窯は焼成中に天井が崩落したと考えられ、窯内に鴟尾(しび)4基が残されていました。

分かっています。山ノ神遺跡の須恵器、瓦の窯は、瀬田丘陵が生産地としての機能をもった最初期の事例といえます。

天智天皇によって、現在の^{にしこおり}大津市錦織地域へ667年に飛鳥から宮が移されます。大津宮です。瀬田丘陵の南西側では、宮が近江に移される直前に古墳群が造営されています。横尾山古墳群は、当時の役人層の集団墓地と考えられますが、横穴式石室墓や直葬墓、^{よこおやま}木炭柳墓などバラエティーに富んでいることから、様々な出自の人が葬られていたと考えられます。また、若松神社古墳においても、横尾山古墳群同様に陶棺を埋葬主体部に使用しており、関連が想定されます。

^{やまのかみ}山ノ神遺跡は7世紀前半から後半にかけて操業した窯4基が見つっています。大津宮が機能していた時期に操業のピークを迎えていたことが瀬田丘陵が生産地としての機能をもった最初期の

◆ II. 大開発時代 – 生産遺跡と近江国府

i) 生産遺跡の展開



源内峠遺跡

瀬田丘陵においては、主に土器生産、鉄生産、鋳造品生産をおこなっていたことがわかっています。また、その工程にかかわる木炭生産（炭窯）、鍛冶工房などの遺構も見つかっています。生産活動の拠点を瀬田丘陵に求めた理由として、炉の構築や土器の原材料となる粘土や燃料となる木材の入手が容易であること、窯等の施設を設置できる傾斜地であること、道が近隣を通っていることから原材料および製品の搬入・搬出の利便性が高いことがあげられます。

| | 600年 | 700年 | 800年 | 900年 |
|-----------|------|------|------|------|
| 山ノ神遺跡 | ●■ | ■ | | |
| 源内峠遺跡 | ▲ | ■ | | |
| 木瓜原遺跡 | ▲▲●▽ | ■ | | |
| 野路小野山遺跡 | ▲ | ■ | | |
| 黒土遺跡 | △ | ■ | | |
| 櫛差遺跡 | △ | ■ | | |
| 近江国庁跡 | ▽ | | ■ | ■ |
| 関津遺跡（田原道） | △ | ■ | ■ | ■ |

◆09 生産遺跡の消長

●=製陶 ■=瓦 ▲=製鉄 △=鋳造 ▽=鍛冶

丘陵内で最も早くから開発が始まったのは、中央、北側に位置する山ノ神遺跡で、7世紀前半には須恵器生産が開始され、7世紀後半に最盛期を迎えます。この最盛期には、須恵器だけではなく、鷗尾（瓦の一種）が焼かれていたことが分かっています。7世紀後半になると丘陵の中央部、最高所に近い谷部で源内峠遺跡が鉄生産を開始します。4基の製鉄炉が見つっています。それに続き、8世紀前半に丘陵東側で木瓜原遺跡、北東側で野路小野山遺跡が鉄生産を開始します。木瓜原遺跡では鉄生産だけではなく、鍛冶、須恵器生産、梵鐘の鋳造を、野路小野山遺跡では複数の製鉄炉が同時に稼働していたことがわかっており、この段階に瀬田丘陵における生産活動の最盛期を迎えます。



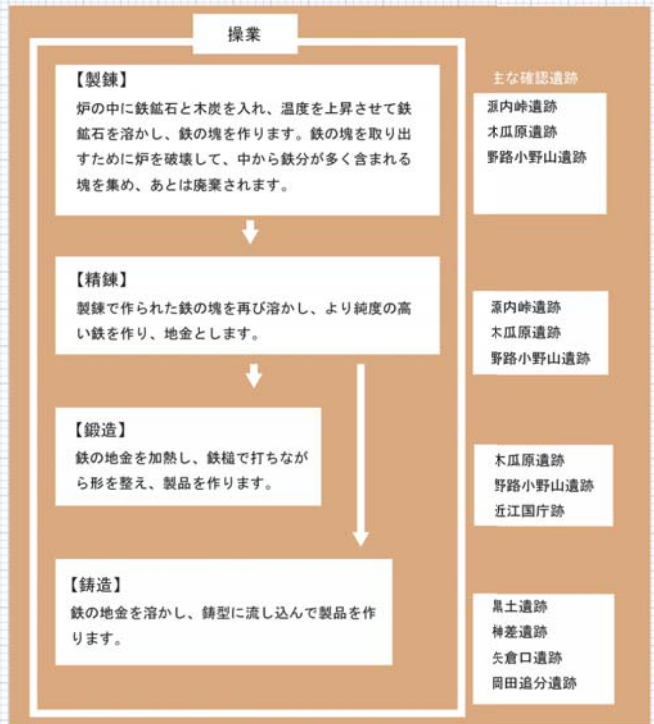
◆10 源内峠遺跡 4号製鉄炉

4号炉は、長さ2.5m、幅0.5mの規模です。左下の白い塊は最終操作時に流出した滓（さい：かすのこと）が堆積したものです。



◆11 源内峠遺跡 1号製鉄炉出土遺物

上段は炉壁（ろへき）で中央にフィゴを差し込んだ送風口が残っています。中段は炉の底に残った滓、下段は最終創業時の炉外に流出した滓です。



◆12 鉄生産の工程



◆13 木瓜原遺跡製鉄炉（上左）

約 9m×6m の盛土上に設置されていました。炉の内部の大きさは、2.58m×0.65m のバスタブ状の箱型炉が復元できます。

◆14 木瓜原遺跡梵鐘鑄造炉（上右）

写真の黒い帯状の部分が鐘の底の部分に相当し、直径 0.85cm を測ります。周辺では外鑄型片が見つっています。

◆15 木瓜原遺跡須恵器窯（左）

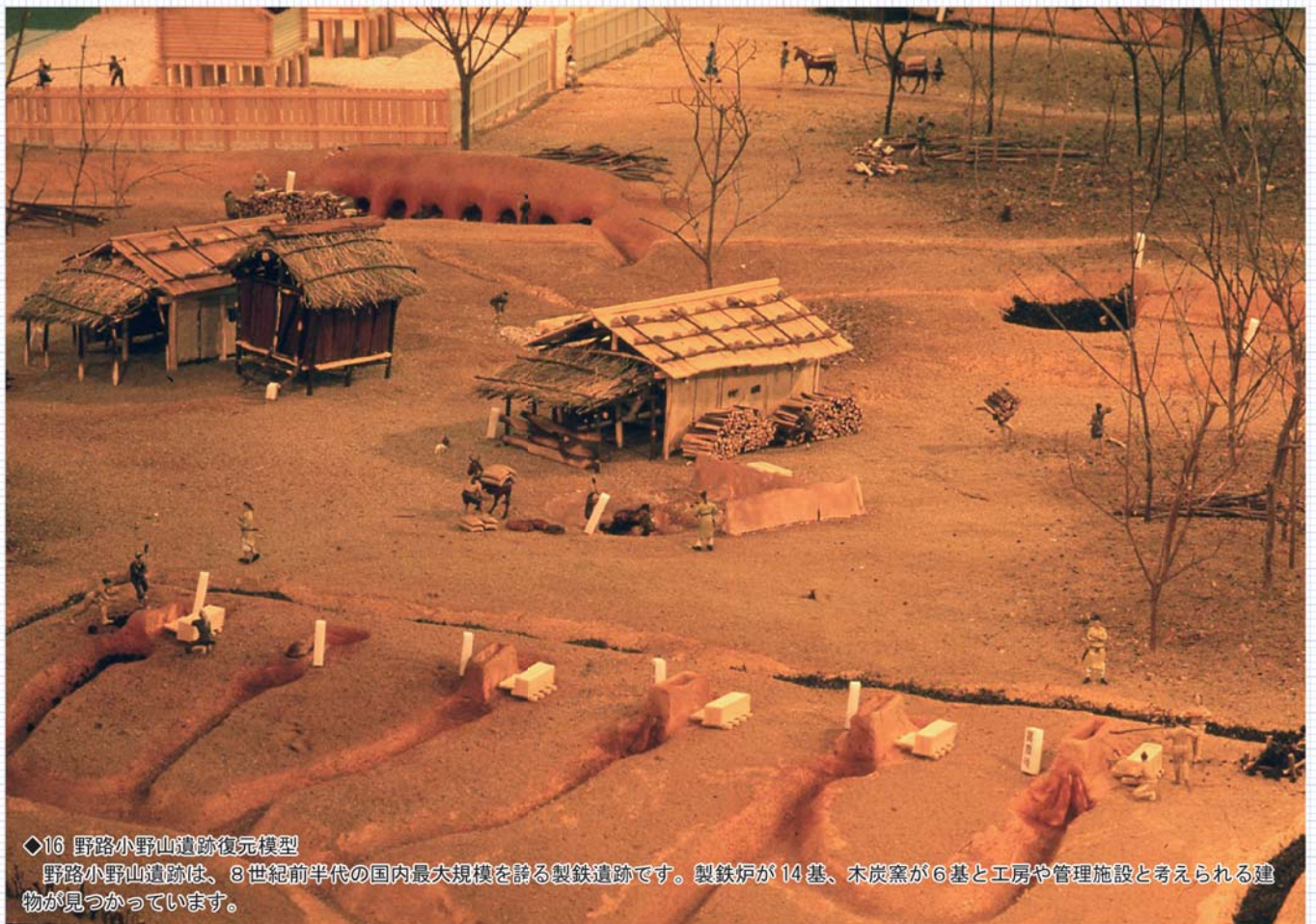
見つかった窯は、床面部分で長さ 3.4m、幅 1.4～1.7m を測ります。天井部分はずでに崩落していました。8世紀前半代に操業していたことがわかっています。



木瓜原遺跡



野路小野山遺跡



◆16 野路小野山遺跡復元模型

野路小野山遺跡は、8世紀前半代の国内最大規模を誇る製鉄遺跡です。製鉄炉が14基、木炭窯が6基と工房や管理施設と考えられる建物が見つっています。



- ◆17 関津遺跡 鑄銅遺構 (上左)
- ◆18 鑄銅遺構出土と同開珎 (左)
鑄銅遺構は、直径 30cm に復元ができ、フイゴの羽口や坩堝、銅滓が出土していることから和同開珎をリサイクルしていたと考えられています。



関津遺跡

◆19 黒土遺跡 T1-3区 工房 SK6

直径 1.4m の鑄込み穴で、周辺の廃棄場所から出土した鑄型から鍋釜を鑄造していたと考えられています。7世紀後半から8世紀前半に操業していました。



◆20 榊差遺跡 T4-5 工房 SK1

南北 2.5m × 東西 1.7 ~ 2.2m、深さ 0.4m の土坑で、大型品を鑄込んでいたと考えられ、7世紀後半に操業していました。

丘陵北東部の黒土遺跡・榊差遺跡で、7世紀後半から8世紀前半に鑄造品を制作していた工房が見つっています。出土した鑄型から獸脚の付く鍋や釜、宝珠形の光背などが制作されていたと考えられています。

また、関津遺跡で見つかった鑄銅遺構からは、和同開珎の細片が出土しています。鑄バリが残っていることや湯まわり不良による欠損が確認でき

ることから、和同開珎の不良錢であったことがわかっています。和同開珎の不良錢を入手し、切り刻み、銅製品のリサイクルを行っていたことから、本遺構もしくは周辺で和同開珎を私鑄していた可能性があるといえます。これは、『続日本紀』の和銅元年（708年）の「近江国をして銅錢を鑄しむ」という鑄錢司以外の官司に銅錢を献上させた記載内容と不良錢を入手することができたことを考えると近江国や関津遺跡の特殊性を示す例といえます。

瀬田丘陵における生産活動は、7世紀前半からはじまり、8世紀中頃にはおおむね終了することが分かっています。つまり、近江国庁の整備がおこなわれた8世紀中頃には、生産遺跡の操業が終息を迎えていたことから生産品が直接供給されていたわけではないようです。この生産地と身近な消費地の盛衰のずれは、瀬田丘陵の原材料の枯渇が原因であったかもしれません。

生産された土器や鉄、鑄造品は、地域で消費できる量ではないことから、国府もしくは中央政権がかかわる工房であったことは間違いありません。生産された素材や製品は地域外に供給されていたと考えられます。『続日本紀』には、天平宝字6年（762年）に「大師藤原惠美朝臣押勝に近江国浅井・高島2郡の鉄穴1処を賜う」と当時の近江国守でもあった藤原仲麻呂と鉄の原料との関係を示す記述があります。この記述は、中央政権の有力者と近江の関係が深いこと、近江国内で資源を確保し、求められる需要に応えることができた大国近江の国力を示しているともいえますが、一方で大規模に、そして100年間に集中して工房を操業したことによって、自然と開発のバランスが崩れる弊害を生じさせた原因にもなったのかもしれません。



◆21 飛雲文（ひうんもん）鬼瓦（上）
 近江国府の中心である政庁から出土した瓦です。雲が流れるような文様が施されており、近江国府ではこの飛雲文がさまざまな瓦に用いられています。

◆22 政庁と東郭（左）
 ともに8世紀中頃に造営されました。政庁では政務や儀式、東郭（とうかく）では儀式や饗応などが行われたと考えられています。



◆23 政庁復元模型
 近江国府は現代でいう滋賀県庁にあたります。築地塀に囲まれた内部に、4つの建物が配され、それぞれが瓦積基壇（かわらづみきだん）の上に建てられていました。

ii) 役所の整備



近江国府跡

古代近江国の政治の中心は、瀬田丘陵の西側に位置する近江国府跡でした。国府とは、国の政庁である国庁のほか、政治に関わる重要な施設が広がる区域で、現在の官庁街にあたります。発掘調査で近江国庁の姿が明らかになり、国府域でもさまざまな施設が見つかっています。

近江国庁は、築地塀に囲まれた区画の内部にある4つの巨大な建物で構成されていました。中心となる正殿は東西 27.9m、南北 19.3mの規模

で、両側には脇殿、後方には後殿が配されていました。出土した遺物から8世紀中頃に建てられ、9世紀初め頃には大改築がおこなわれ、10世紀後葉まで存続したと考えられています。その機能した年代は、政権内で巨大な権勢をふるった藤原仲麻呂が近江国守を務めていた時期と合致しており、この造営には彼の意向が強く働いたことが想像されます。

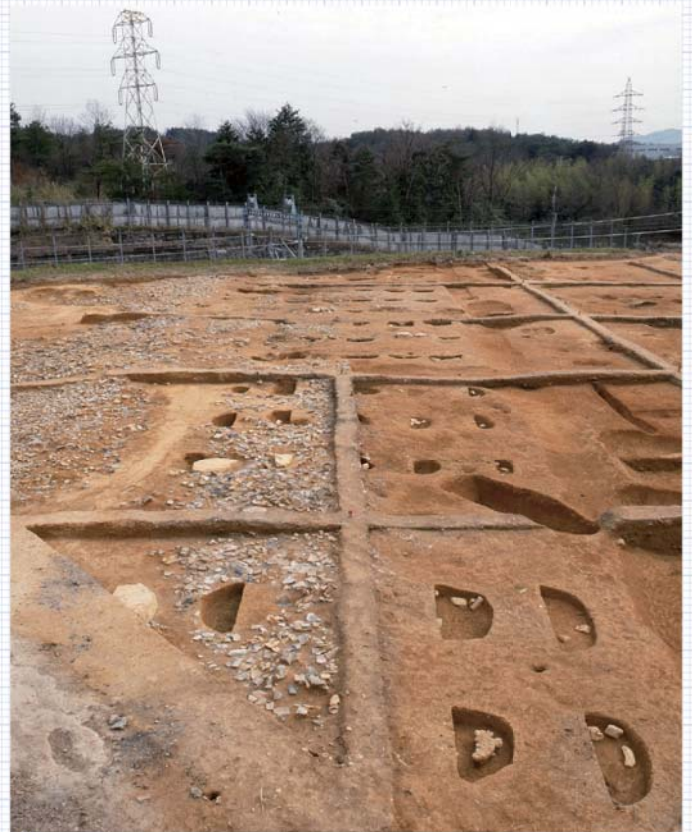
国府内に所在する施設についてみていくと、国庁の南側に位置する青江遺跡では、桁行9間（27m）梁間2間（6m）の大型掘立柱建物と築地塀が見つかっています。築地塀の間では国庁からまっすぐ南に延びる道が想定され、大型建物を国司の居宅である国司館とする見解もあります。

国庁の東側に位置する惣山遺跡では、巨大な倉庫群が見つかっています。1棟の規模も巨大ですが、それが計12棟、南北約 300mにわたって一直線に連なる形で配列されていました。丘陵上に立てられたこの倉庫群の麓には、古代の官道がとおっており、巨大な建物が並ぶ様を、行き交う人々が驚嘆の



◆24 近江国庁と惣山遺跡

惣山遺跡では、巨大な建物跡や大がかりな造成工事が行われた痕跡などがみつかっており、国府の重要な施設だったと考えられています。



◆26 惣山遺跡で検出された建物 10～12 (上)

総柱の礎石建物で倉庫と考えられています。1棟の規模は21m×7mと巨大なもので、それが計12棟、直列に配されていました。

◆25 惣山遺跡の西側で検出された版築遺構 (左)

土をたたき締めながら何層にもわたって積み上げていく版築(ばんちく)と呼ばれる工法が確認され、巨大な土塁などの可能性が考えられています。



◆27 「承和十一年六月」刻印瓦

刻印された承和十一年は西暦844年になります。発見された堂ノ上遺跡では、国庁の瓦と同じ范型で作られた瓦が多数見つかっています。



野畑遺跡

思いで見上げていたことでしょう。

国庁から南西側には、堂ノ上遺跡^{どうのうえ}、中路遺跡^{ちゅうろ}、瀬田廃寺^{のぼたけ}、野畑遺跡が位置しています。堂ノ上遺跡では、古代の官道跡と築地で囲まれた複数の建物跡が発見されており、勢多駅に関連する施設と考えられています。同じく中路遺跡においても官道跡と2棟の瓦葺礎石建物が見つかっています。

瀬田廃寺は、中路遺跡の南側の丘陵上に位置しており、塔と金堂が南北に並ぶ四天王寺式の伽藍配置であったことが確認されています。奈良時代の近江国分寺の有力な候補でしたが、文献に記載されている火災の痕跡が認められないことなどから否定的な見解も出されています。しかし、国府を構成する寺院であることは間違いのないでしょう。

野畑遺跡は、瀬田廃寺の西側に広がる遺跡で、平安時代初期の瓦窯や掘立柱建物が見つかっています。出土している遺物は、木簡や人形代^{かたしろ}、土馬^{どば}、斎串^{いぐし}、木沓^{きくつ}、二彩陶器^{にさいとうき}など官衙的な内容が目立つことから、国府との関連が考えられますが、天平宝字5・6年(761・762年)におこなわれた石山寺増改築事業の拠点であったとの見解もあります。

このように、勢多橋を渡った地点から丘陵部には、国府関連の遺跡が連なっていることがわかります。

◆Ⅲ. 道のおおる地 – 関津遺跡と榊差・黒土遺跡



◆28 関津遺跡 推定田原道
道路跡は両側溝を備え、側溝の中心間で幅 18m にもなります。道路の両側には、同時期の 90 棟近い掘立柱建物がみつかっています。



◆29 関津遺跡出土 8 世紀中頃から 9 世紀中頃の土器
土器類の中には、一般の集落ではあまり出土しないようなものも多く、公的な施設が存在していた可能性が高いといえます。



◆30 関津遺跡出土大和型瓦器（がき）
平安時代後期（12 世紀頃）の田上低地では、近江の他地域とは異なり大和型と呼ばれる瓦器（写真の黒い土器）が多く出土します。この地域が大和と密接な関係にあったことがうかがえます。

せきのつ i) 関津遺跡



飛鳥時代を経て奈良時代になると、都から放射状に各地方へ向けて巨大な道路が建設されました。東海道や北陸道、山陽道といった現代でもなじみのある名前の道路です。その道路は、都と地方をいち早く結ぶために可能な限り直線で、路面幅も 10m 以上の規模をもって敷設されていたことがこれまでの研究や発掘の成果からわかってきており、その大きさには目をみはるものがあります。

大津市関津遺跡で見つかった道路跡は、『続日本紀』の藤原仲麻呂の乱の折にその名がみえる「田原道」にあたると思われると考えられています。



◆31 黒土遺跡で検出された長舎（ちょうしゃ）
 右下の写真の東山道と推定される道路跡から200mほどのところには、東山道の名残りを示す細い道がまっすぐ南笠の集落の中まで延びています。ここから約60m離れた場所では東山道に方位を揃えるように長舎建物がみつけられました。



◆32 黒土遺跡で検出された長舎建物
 長舎建物（人が立っているところが柱の跡）は長さ45m、幅5.4mとなり、滋賀県内でも屈指の大きさとなる建物です。



◆33 榊差遺跡で検出された推定東山道
 両側に側溝を備え、路面の中央部分が40cmほど窪んでいます。両側溝間の幅は16mにもなります。

くろ つち さかきざし
 ii) 黒土遺跡・榊差遺跡



黒土遺跡

奈良時代になり幹線道路の一つである東山道が整備されると、広域地域間の交通の便がよくなり、新たに人や物資が集まると同時に様々な生業も根付いていきます。

東山道は草津市内では、南草津に所在する野路岡田遺跡から黒土遺跡・榊差遺跡にかけてみつかっており、幅20m近くの道路が800m以上にわたって直線で造られていたことがわかっています。また、この地域では、草津から瀬田にかけた丘陵地域に展開した製鉄生産と軌を一にするように金属製品の生産が行われるようになります。材料の調達から製品の輸送に適した交通の利便性が、この地に金属製品生産をもたらしたのも必然の結果であったということができます。みつかった長舎建物もこれら交通や金属生産に伴って設置された建物であったと推測されています。

◆エピローグ - 近世から現代へ



田上山



◆34 関津遺跡で検出された護岸遺構
瀬田川東岸では15世紀の港湾の一部と考えられる護岸施設が検出されました。江戸時代の関津浜の前身と考えられます。



◆35 関津遺跡で検出された河川の堆積状況
こうした堆積物は河川の堆積作用や氾濫によるもので田上山の荒廃過程を知ることができる資料の一つです。



◆36 関津遺跡出土樽材（くれざい）
復元できた樽は『延喜式』の規格と同じであり、切り出した木材を遺跡内で製材したと想定されます。石山寺造営の際に置かれた田上山作所（たなかみさんさくじょ）の存在を裏付けるものといえます。

田上山は、藤原宮や石山寺造営など、公的造営を支える木材の産出地でした。古代から近世まで森林資源を都や寺造営等に供給しつづけたために荒廃が進みました。田上山は、風化した花崗岩質の土壌のため、荒廃が進むと大雨のたびに土砂が流出し、下流域に被害をもたらしました。また、江戸時代には燃料用の松根の採取が、山地を荒らす大きな原因の一つとなります。特に瀬田川に合流する大戸川流域の田上低地では度重なる水害に悩まされ、村ごとの移転を余儀なくされています。

明治に入ると、政府がオランダから招いた治水技師による近代的な治水事業が始まり、田上山も緑が戻りつつありますが、いまだにおき出しの山肌も見られ、一度崩壊した自然を取り戻すのは容易ではありません。私たちは常に自然とともにあることを忘れてはならないのではないのでしょうか。

◆VI. 瀬田丘陵を楽しむ



◆38 石山貝塚
石山寺の観光駐車場の脇に残されています。石山観光協会の建物で貝層の剥ぎ取りを見学することができます。



◆39 移築された横尾山1号墳
大津市神領の建部児童公園内に移築されています。切石造りの石室を見学することができます。



◆40 若松神社古墳（久保江古墳）
大津市大江の若松児童遊園地内に保存されています。石室内には陶棺のレプリカが置かれています。





◆41 近江国庁復元建物
史跡として保存整備されています。
現地では、築地塀等が復元されており、
見学することができます。



◆42 山ノ神遺跡復元された窯
地元の保存活用団体が復元模型作っ
て地上に遺構表示をしています。



◆43 源内峠遺跡 復元された製鉄炉
びわこ文化公園内に地下保存され、
地元の保存活用団体が製鉄炉を復元し
ています。



【執筆】

プロローグ：瀬口眞司

Ⅱ - ii：木下義信

Ⅲ：内田保之

エピソード：小竹志織

その他 / 編集：堀真人

【写真・図面提供】

◆08. 24-26 大津市埋蔵文化財調査センター

◆19. 20. 31-33 草津市教育委員会

◆18. 21. 27 滋賀県所蔵 / 滋賀県立安土城考古博物館提供

◆16. 23. 38-43 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

◆その他 滋賀県

【主な参考文献】

- ※県教委=滋賀県教育委員会 協会=公益財団法人滋賀県文化財保護協会 / 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 大津市教育委員会 (2005) 『山ノ神遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
- 大津市教育委員会 (2006) 『近江国府関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ - 重要遺跡・青江遺跡の確認調査』
- 大津市教育委員会 (2008) 『近江国府関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ - 中路遺跡』
- 大津市教育委員会 (2009) 『近江国府関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ - 惣山遺跡』
- 大津市教育委員会 (2009) 『近江国府関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ - 青江遺跡・中路遺跡』
- 沖森卓也ほか (2019) 『現代語訳 藤氏家伝』ちくま学術文庫 筑摩書房
- 協会 (2010) 『関津遺跡 - 近江の南の玄関口』シリーズ近江の文化財002
- 草津市教育委員会 (2008) 『野路岡田遺跡発掘調査報告書』
- 草津市教育委員会 (2022) 『榑差遺跡・榑差古墳群・黒土遺跡・南笠古墳群発掘調査報告書』
- 草津市教育委員会 / 協会 (2021) 『榑差遺跡・榑差古墳群・黒土遺跡』
- 県教委 (1975) 『昭和48年度滋賀県文化財調査年報』
- 県教委 (1977) 『滋賀県文化財調査報告書』第6冊 史跡近江国衙発掘調査報告
- 県教委 (1977) 『昭和50年度滋賀県文化財調査年報』
- 県教委 (1994) 『平成4年度滋賀県埋蔵文化財年報』
- 県教委 (2004) 『史跡近江国庁跡 附惣山遺跡・青江遺跡 調査整備事業報告書Ⅱ』
- 県教委 / 協会 (1988) 『横尾山古墳群発掘調査報告書』
- 県教委 / 協会 (1992) 『唐橋遺跡』
- 県教委 / 協会 (1997) 『栗津湖底遺跡第3貝塚』
- 県教委 / 協会 (1996) 『木瓜原遺跡』
- 県教委 / 協会 (2010) 『関津遺跡Ⅲ』
- 県教委 / 草津市教育委員会 / 協会 (1990) 『野路小野山遺跡発掘調査報告書』
- 瀬口眞司 (2016) 『琵琶湖に眠る縄文文化 栗津遺跡』新泉社
- 滋賀県立安土城考古博物館 (2011) 『大國近江の壮麗な国府』第42回企画展図録
- 平井美典 (2010) 『藤原仲麻呂がつくった壮麗な国庁 - 近江国府』新泉社

滋賀県埋蔵文化財地域展V 瀬田丘陵編

人と自然 - 瀬田丘陵の開発史 -

会 期：2023年7月22日～11月12日

会 場：滋賀県埋蔵文化財センター

主 催：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

後 援：滋賀県・大津市・草津市教育委員会

発行年：2023年7月

編集 / 発行：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

しがぶんちゃん



どきっち